

【人の持つ判断力について】

日常場面で様々なことに気づくことができない問題も、自分が育ってきた環境の影響。自分の気持ち（訴え）を感じとってもらえた経験が自分の快感情を育て、心の安定感となり、自分の中に定着していく。生まれた時からの何度となく繰り返される自分への世話がどれだけ当人の欲求にあったものだったのかが問われる。その体験の質が大人になったときの判断力という感覚を養うことにもなる。そこで適切な世話がされなければ、自分の中の感覚もあいまい（鈍感）になり、健全なものには育たないことは心の育ちと同じ。何が気持ちよく、何が不快なのか？何をどうしてもらおうと安心できるのか？何をされると嫌な気持ちになるのか？という感覚・感受性も乳幼児期に育てている。

心を育てるということは人の感覚（感受性）を育てることでもあるから、どれだけ自分の気持ちに寄り添ってもらえたかということが、のちのその人の感覚という判断力の違いとなって現れてくる。人の判断は外部からの刺激を通して、今まで自分が経験して得た情報やそれまでの経験で生じた感情など、内面の心理作用が影響を与えている。人とのコミュニケーションも同じことで、乳幼児と一緒にいる時間をどれだけ共有し共感し楽しんでもらえたかが、自分自身がその後に関わる人との関わり方の基礎になっている。一緒にいる人が自分といることを楽しんでくれるということは、人を信頼できるという力になり、外の世界に自分の力で出ていこうとする力にもなる。「この世の中は楽しいから探検に行ってみよう！」という好奇心となり、行動を起こす力にもなる。これが自発性・主体性の基礎。乳幼児期には感受性、人とのコミュニケーション、人との距離感、自分でできること、できないこと、最後までやりぬく力など、人として生きていく上で大切なものを大きく育てていく時期。そしてその「人を」「世の中を」信頼できる力が判断力にも影響を及ぼす。

だから現代特有の手っ取り早く簡単に済ませるといった日常生活の流れに、何の疑問も感じることができない人がそのまま育児をしてしまえば、子育ても手抜きになり、子どもとの心の触れあいという貴重な時間が単なる流れ作業になってしまう。それでは子どもの感受性という感覚も健全に育つことはできない。また、心に負の感情を抱えた人が子育てをすれば、感覚の鈍さゆえに子どもの訴えに適切に反応できない問題もある。

乳幼児期の体験で快感情を感じる機会が多く、不快なものは適切に取り去ってもらえれば、感受性も良い方向へ育つ。でも不快な感情の方が多く、それを処理してもらえなければ、それを感じることを避ける作用が生じるので、当然感受性は育たずに鈍感（感覚麻痺）になる。自分の身の回りに不快な出来事が多く、それを誰かに理解・受け止めてもらうことが少なく育った場合は、負の感情となって自分の中にどんどん溜まっていく。環境が悪いために心に安心感も育たず、その不安定な心を自覚できずに、自分の不安な心という問題から遠ざかることになる。その人の持つ力に自己主張の力が強ければ、不快な出来事も何かの形で表現できるだろうけれど、その力がもともと弱い人は、不快な感情が発生してもそのまま自分の中に溜めていくことしかできない。それが乳幼児期に多ければ、そのことを想起できない（記憶から呼び覚ませない）。乳幼児期は自我の存在が大きくなるようになっていく時期のため、まだほとんどが無意識の領域が優勢を占める状態（自分の認識が薄い）。だからそのときの出来事は無意識層に溜まっていく。そのため負の感情が溜まっても自覚できず、大人になったときに思い起こそうとしても思い起こせなくなる。これが問題でもある。しかも負の影響を受けた人は感覚が鈍っているため、自分の問題が「何」なの

かがわからない。自分の気持ちを受け止めてもらっていないため、素直に出すことができない。自分以外の人を信用できない不安を抱えているので自分を正直に出すことができない。それは自分を隠していること。自分に嘘をついて偽っていることでもある。自分を偽っていれば当然自分の気持ちもわからずに、問題は「何か？」がわからないということになる。自分に嘘をつくから鈍感になり、鈍感になるから問題があることに気づかないという悪循環に陥る。感受性の低さは大きな問題になる。さらに鈍感だから判断力も働かず、自分以外の人と同種の問題にも反応できない。だから問題を素通りしてしまう。判断力の鈍さとはそういうこと。物事の判断はその人の持つ感覚を通して行われるので、良い体験を重ねていなければ、良質の判断力（直感力）も持つことができないということ。そして乳幼児期の出来事は無意識の領域に溜まっているから、大人の時点でわかっている自分がすべてではないということを知ってほしい。自分に都合の悪いこと、嫌な思い出は意識に上がってこないよう、心の奥深く眠らせている。だから自己観察する習慣をつけなければ、見失ってしまった本当の自分には出会えないままになる。今認識できる自分で満足しているようでは、心が成長できずに人生の時間を無駄にすることになる。

そしてもう一つ、上記のような歪んだ感覚にあまりに鈍感な現代人は自分たちがどこの上で暮らしているのかを見失っている。自然が好きな人もいて、自然を大切にしている人もいるけれど、ほとんどの人がこの環境の意味を理解できず、自然を壊しても何も疑問に感じないほどの不自然な状態にある。あまりに人間の都合に合わせて壊されてしまった環境でしか暮らしていないため、本来の自然を理解できなくなっている人間。簡単に自然は良いものだという考えに疑問を感じる。「自然は素晴らしい」という前に、自分たちの知らないところで人間は何をしているのかを知るべきだと思う。

地球の大切な自然は私たちの食欲を満たすために焼かれ、どんどんなくなっている。地球のどこかで飢えている子どもが何十万人といるのに、一部の国の飽食用の家畜のために大量の穀物が与られている。自分たちの貪欲な食欲のために無駄に犠牲になる自然と動物たち。ファッションのためにだけに命を奪われている動物もたくさんいる。あまりに人間のためだけに作られ、複雑になりすぎた社会は自分たちがどれだけの自然を、動物を、傷つけているかを想像できなくさせている状態。簡単に何でも手に入る環境のおかげで本来知っていなくてはいけないものが見えなくなっている。それでは本来の自然の意味が歪んでしまっている。この地球環境があるからこそ生きていける私たちはこれからどこへ向かうのだろうか…？と思わずにはいられない。この地球だけでは足りなくなる。

「自然は素晴らしい」から自然に癒されたいといいながら、遠回しに自然を破壊することに加担してしまっている現在の状況と、自然を大切に思う気持ちの質があまりにかけ離れていることに気づいてほしい。

2015/01/28 sasa

